日本語と中国語

陳舜臣・陳謙臣

徳間文庫

徳間文庫

日本語と中国語

© 1985 Chin Shun Shin and Chin Ken Shin
Printed in Japan

128-5

1985年3月15日　初刷

著者　陳舜臣
　　陳謙臣

発行者　荒井修

発行所　株式会社徳間書店
東京都港区新橋四―一〇　〒一〇五
電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替　東京四―四四三九二番

印刷　凸版印刷株式会社
製本

〈編集担当　芦沢孝作〉

ISBN4-19-567810-2（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

江苏工业学院图书馆
藏书章

徳間文庫

日本語と中国語

陳 舜 臣
陳 謙 臣

徳 間 書 店

初刊本まえがき

こんどは日本と中国のちがいを、言葉の面からとらえる、といったふうに的をしぼって書くことになった。

在日中国人である著者たちは、一人は小説家として文章をかく立場から、一人は華僑の学校の教師として、日本育ちの中国人子弟を教える立場から、兄弟でそれぞれ材料を持ち寄って、まとめたのが本書である。

漢字という共通の道具をもっているのだから、これこそ日中両国の相互理解の手がかりでなければならない。

むろん共通といっても、そのフィーリングに甘えて、底にあるきびしい相違を見おとすことがある。しかし、その鑑別法には、はっきりしたルールはない。

泳ぎのできる人とできない人のあいだには、言葉で説明しにくいコツを会得したかどうか、というだけの違いしかないものである。

おなじように、漢字を相互理解の道具にするについても、コツというものがあるような気がする。それは言葉で説明しにくいといったが、言葉で説明するほかはなく、手さぐりでそれを試みた次第である。

学術書はないのはもちろんである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

食べもの随筆というのがあるが、これは言葉をテーマにして、それからあまり逸脱しないようにして書かれた、『言葉随想』というべきものかもしれない。

あるいは、『日本語と中国語』という仮の題に与えられたよもやま話、のつもりで読んでいただいたほうが、著者としては気がらくである。

とはいえ、簡体字などは、よもやま話のうちに片づけられる問題ではないので、できるだけ正確を期して、別にリストを作成した。中国の簡体字を、日本の当用漢字と対照したのは、おそらく本書をもって嚆矢（こうし）とするのではあるまいか。

中国にたいする認識が、すこしでも正しい方向に高められること、そしてこのよもやま話が呼び水となって、もっとすぐれたものが、このうえに積みあげられることを、本書をまとめながら切に希望したことである。

一九七二年九月一日

陳舜臣（ちんしゅんしん）

目次

初刊本まえがき　3
序章　中国語の成り立ち　7
一章　日本漢字でどこまでわかるか　23
二章　似て非なる日本語と中国語　51
三章　日本語より英語に近い中国語　77
四章　新しく息吹く中国語　99
五章　現代中国語と漢文　117
六章　新しい文字の出現　141
七章　最低必須会話と常用漢字の日中対照表　151
初刊本あとがき　217

序章
中国語の成り立ち

●漢字簡略化は時代の必然

魯迅「漢字が滅びるか、民族が滅びるか」

――出生不報、死而不葬。

という言葉があります。生まれても届け出をしないし、死んでも葬式をしない、という意味です。

なんのことでしょうか？

漢字のことです。

後漢の許慎の『説文解字』（紀元一〇〇年完成）という字書には、九千三百五十三字がのっていました。それから千六百年後の『康熙字典』の収録漢字は四万を越えています。

漢字はそれをつくる一定のシステムがありますから、必要があれば、いくらでも新しい字をつくることができます。べつに出生届を出さなくても、みんながそれを使えば、認知されたこ

とになるのです。不要になった漢字は、葬式を出さなくても、やはりみんなが使わなくなれば、墓場行きであります。

しかし、字典には収録されますので、四万字を越えてしまうことになったわけです。この数字に驚くことはありません。実際に使われる漢字はそんなに多くないのです。

中国文字改革委員会は、一九五六年に『通用漢字表』の草案を発表して、各方面の意見をもとめました。ぜんぶでそれは五、四四八字で（あとで五〇〇字追加されました）、そのうちわけは、

常用字　一、五〇〇字
次常用字　二、〇一五字
不常用字　一、九三三字

となっています。

常用字と次常用字あわせて三、五一五字は、小学校教科書の編集や、通俗読物、大衆用小字典類の基本用字に用います。不常用字は文語・姓名・地名・専門用語に用いるもので、比較的高級な書籍、刊行物に使おう、ということになっているのです。

一九六三年の北京の小学校の『語文』（19ページ参照）教科書での新出字は、

一年生　約七五〇字
二年生　約八五〇字
三年生　約六〇〇字

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

四年生　約五〇〇字
五年生　約五〇〇字
六年生　約四〇〇字

で、合計三、六〇〇字になります。

日本では教育漢字九九六字で、これを小学校六年間で消化するのですから、ずいぶんらくです。教育漢字を含む日本の『常用漢字』は一、九四五字です。中国では、三年生までにそれくらいは迎え討たねばなりません。

現在、中国での文字や言語にかんする基本方針は、毛沢東の『新民主主義論』にある、

――文字は一定の条件の下で改革されねばならず、言語は民衆に接近しなければならない。

……

にもとづいています。文字改革は、

1　漢字の簡略化
2　ローマ字化

の二つの路線を進めているのです。

簡略化された文字は、簡体字、簡化字、簡字とも呼ばれ、一九五六年二月から、各印刷物に正式に採用されました。旧来の字は『繁体字』と呼ばれ、特別な場合を除いて、使用停止となりました。簡体字については、あとでふれますが、繁体字と日本の常用漢字をならべて、かんたんに比較してみましょう。

現行字（簡体字）	繁体字（旧漢字）	常用漢字	
旧	舊	旧	両ほう変わって一致。
无	無	無	中国のほうだけ変わった。日本は変わらず。
华	華	華	
缺	缺	欠	日本のほうだけ変わった（欠は中国にもとから別の字がある）。
佛	佛	仏	
从	從	従	両ほう変わって、相違。
传	傳	伝	
暖	暖	暖	両ほう変わらず。
影	影	影	

中国語のローマ字化にかんしては、周恩来（しゅうおんらい）首相が日本の訪中団に、

――二十一世紀の問題である。

と述べたと報道されています。四声（しせい）という声調をもった中国語のローマ字化は、日本の場合よりも問題が多いようです。いまのところ、舞台にのぼっているのは、もっぱら漢字の簡略化の問題です。他人に指摘されるまでもなく、漢字がややこしいことは、中国人がいちばんよく知っています。ある人は、このややこしさを誇り、またある人はそれを憂えてきました。

――漢字が滅びるか、民族が滅びるか。

と言った魯迅は、後者の代表といえるでしょう。これは古い問題でもありました。民間では早くから略字が使われ、『俗体字』という、あまりりっぱでない名称が与えられています。とくに深い教育を受けていない人たち、あるいは商人の書簡文には、しきりに用いられていました。明末清初の大学者、黄宗羲（『明夷待訪録』の著者）は中国のルソーといわれる人でしたが、俗字の使用をすすめ、

――時間を節約できる。

と、自分でもよく使いました。

辛亥革命以後、略字使用は一つの運動となり、五四運動以後は、それが一そうさかんになったのです。国府が政権を握っていた一九三五年に、教育部（文部省）も、『第一批俗体字表』を発表しました。政府公認の略字で、第一回は三百二十四字でした。つづいて、第二回、第三回の発表があるかと思っていたら、とんと音沙汰がなく、それどころか、

――不必推行。（実行する必要なし）

ということになってしまいました。

保守的な人が、略字運動を目の敵にして、つぶそうと画策したのでしょう。漢字のために命乞いをすることが、民族の文化遺産を守る道だと思い込んだ人が、すくなくなかったのです。ほんとうは、文字の簡略化こそ、言葉が生きのびるための方法だったのですが。

ときどき整理、簡略でもしないと滓がたまって仕方がありません。

――これは言葉ではあらわせない。

――前代未聞である。

といったオーバーな感情をもつ人があらわれると、とかくこれまでにない字をつくりたがります。七世紀の則天武后は、妙ちきりんな新字をずいぶんつくりました。曌［zhào］という字もその一つです。この字は自分の名前のためにつくったのですが、他人迷惑というほかありません。

王制時代の中国では、皇帝が即位すると、皇帝の名は一字でも人民の名に使えないことになっていました。もしおなじ字をすでにつけておれば、改名しなければなりません。これは地名にまで及びました。アヘン戦争時代の清国皇帝の道光帝は、『昊寧』という名でしたが、彼の治世のあいだ、寧波という対日貿易で知られた町は、『甯波』と書かれたものです。

明治中期以後、中国から大ぜいの留学生が日本に来て、東京高師校長嘉納治五郎（『姿三四郎』の矢野先生のモデル）が、当時の文部大臣に頼まれて、その受け入れの学校をつくりました。そこで日本語を教えてから、各大学や高専に進学させる、いわば予備校のようなものですが、嘉納校長はそれに、

――弘文学院。

という名をつけました。

当時はいうまでもなく清朝時代です。日本では明治大帝に相当する、清の大帝が乾隆帝ですが、その名が『弘曆』でした。それで留学生のなかには、弘文学院という名はおそれ多いと

尻ごみする者がいました。あるいは、卒業しても、

——弘文学院卒業。

と書けないではないかと、不満に思う人もいたのです。

そこで、仕方がないので、嘉納校長はべつに、

——宏文学院。

という名をつけました。改名ではなく、おなじ学校に二つの名を用いたのです。

このあいだ、香港の三育という書店から出た『魯迅年譜』（著者は曹聚仁）を買ってみていますと、魯迅（これはペンネームで、本名は周樹人）は二十二歳で日本に留学し、『宏文学院』に入学し、二十四歳で『弘文学院』を卒業して仙台医専に進学したことになっています。事情を知らない人は、てっきり転校したと思うでしょう。

清朝時代の文書で、とうぜん『暦』とすべきところを『歴』と書いている例が多いのですが、これはミスではなく、わざとそうして、大帝の名と同字になるのを避けたのです。

こんなふうに、似た字に変えたり、同義語に変えるほか、わざと一画を欠く方法もありました。これを欠画、または闕筆といっております。たとえば唐の高祖の李淵が天下を取ったとき、サンズイをニスイに変えて、『淵』という字が生み出されました。欠画で一ばんふつうなのは、最後の一画を省く方法です。

たとえば、季という名の皇子が即位すれば、季の字を名前にもった人たちは、別の字に改名するか、あるいは欠画して『季』という、けったいな字を使わねばなりません。

これでは文字がふえる一方です。このような文字を使う言語が生きのびるためには、整理運動によるほかはありません。すなわち、保守主義と戦うことが、中国語と漢字にとっては、与えられた運動でした。

最近の思い切った漢字簡略化は、中国語のローマ字化の問題をすこし先へのばしたかもしれません。

方言は田舎言葉ではない

――状元説方言、皇帝聴不懂。

という言葉があります。

『状元』とは、旧中国における官吏登用試験の『科挙』で、首席パスした人のことです。ちなみに、次席合格者を『榜眼』、三位合格を『探花』といいます。

時代によって違いますが、清代ではふつう三年に一度『会試』（科挙で第一回試験に及第した受験者が、みやこで受ける第二回試験）がおこなわれ、数万の受験生のなかからトップにえらばれるのですから、状元といえば大へんなものです。皇帝からも言葉をかけられるのですが、それに答える状元が方言を使うので、皇帝はさっぱりわからない、という意味です。『懂』は『わかる』――聴不懂で、きいてわからない、ということです。

皇帝はたいてい北方の出身であります。中国では、米を食べる人間は皇帝になれない、とい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com